

『アフガン農業支援奮闘記』出版によせて

(高橋修編著 石風社)

アフガン・緑の大地計画の現場から 復活しつつある農の営み



サキユマイモの大豊作

お話

高橋 修さん

(ペシャワール会農業指導員)

「ともに流した汗と涙・

ともに交わした実りの笑顔」



進藤 陽一郎さん

(ペシャワール会ワーカー)

「元ひきこもり学生

アフガン山村にのめりこむ」



5月8日(土)

午後1時30分より

(1時10分受付開始)

ひと・まち交流館 京都

大会議室 (五条河原町下ル・東側)

●参加費 500円

●主催 ピースウォーク京都

090-6325-8054 peace@pwkyoto.com

当日、本を定価2,625円のところ、2,300円で販売します。ぜひ会場でお買い求めください。



ひと・まち交流館 京都
TEL 075・354・8711
市バス4、17、205号系統
「河原町正面」下車

『アフガン農業支援奮闘記』の出版に際して、高橋修さんと、ワーカーの進藤陽一郎さんをお招きし、お話を伺います。みなさん。ぜひお越し下さい。

農業支援はどのように進められたのか

ペシャワール会が2002年3月に発足させた「緑の大地計画」の一翼として進められました。井戸による飲料水の確保、用水路による農業用水の確保と共に、乾燥に強い作物の試作・普及により、旱魃に苦しむアフガンに、緑の大地を復興させることが目指されました。高橋修さんを中心に、日本人ワーカー、現地の農民たちが一緒になって取り組みました。

計画はどのような考えで進められたのか

高橋さんが語る「現地主義」の原則が軸になりました。「主役は農家」「現地の技術を改良しながら」「資機材は現地調達を基本として」の3点を中心とするもので、日本からの「技術移転」や「技術指導」という尊大な視点に立たず、アフガンの風土の中で培われてきた伝統的な知恵に学び、農家の意見を集め、課題を共有していくことが核心でした。

現地農民の意見とは何だったのか

農民の切実な要求の第一は「子どもだけにはひもじい思いをさせたくない」でした。主食の確保です。第二には家畜の餌を確保すること。アフガンでは家畜はいざというときの大切な貯金です。第三が優良種苗の配布であり、第四が生活に潤いをもたらす作物の栽培でした。高橋さんたちはこれに節水技術と、地力増強技術の開発・普及を加えました。

実際に栽培に成功した作物は

主食では小麦、米、サツマイモ、そば、大豆。飼料ではソルゴー、アルファルファ。この内小麦は伊藤さんが中心になり、現地農家の工夫を集大成して大成功しました。進藤さんは、これらの成果を普及するために収穫祭を開き、地元の長老達にタネをプレゼントしました。しかし、お茶、ブドウ、除虫菊は四苦八苦の連続であったとのことでした。

計画は今、どのようになっているのか

計画は順調に進んでいたものの、米軍の度重なる無謀な軍事作戦によって治安が不安定になる中、2008年夏に伊藤和也さんが拉致され、殺害されるという悲劇が起こり、計画の中断を余儀なくされ、日本人ワーカーが引き上げなければなりません。しかし計画は地元農家に引き継がれ、遅く前進しています。その報告が現地から届いています。

高橋さん、日本人ワーカー、現地の農家が一体となった奮闘記を、ぜひ聞きに来て下さい！

中村哲さん講演会 2010のお知らせ

2010年11月21日(日)午後

京都ノートルダム女子大学 ユニソン会館にての開催が決定しました！